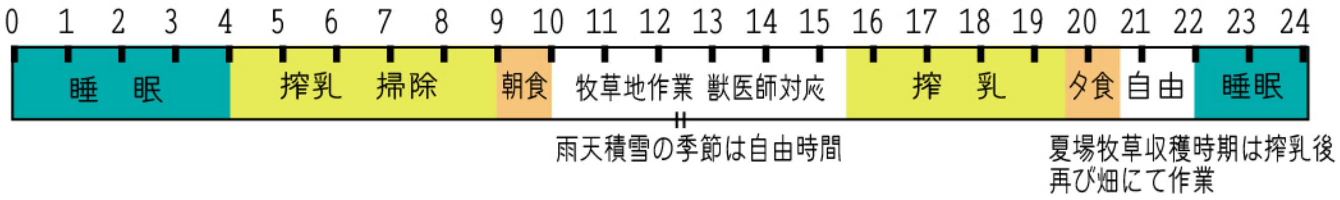
原田牧場 Note

Page 4

原 田　希



酪農家のタイムスケジュールです。夫に出会うまで、1日２回も搾乳をしているとは知りませんでした。しかも休みがないとは！（土日休みと思っていた）。さらに２食制！（牛の給餌が２回だから合わせてる？）。結婚前は「３食昼寝つきだよ」と聞いていましたが、食事と時間を己で作りだせれば、でした（話おわりやん…）。心の中で突っ込みながらも、このスケジュールで生活して15年、えらいもんで体は慣れます。牧場の両親とは敷地内別居。朝食だけ母家で一緒に食べています。業務連絡、体調確認、牧場運営のお金の話から、ご近所の噂話まで、大事な話を共有する時間。ホッケフライ、牛乳豆腐、三平汁、いもだんご、鮭のいずし、イクラの塩漬け、ざんぎ、自家製ヨーグルト　などなど。早朝から体を動かして働き、おなかぺこぺこで帰ってきて、夕食並みのごちそう。最高に美味しい朝食を食べているのは間違いなく我々、と密かに思っています。ちなみに、自宅の牛乳は意外と飲んでいない酪農家。牛乳＝収入源、頭数が少なかった時代のなごりかもしれません。

牧場にはホルスタインのメス、乳用牛しかいません。時々、オスもいるんですか？と聞かれます、オスも牛乳が出ると思っていたそう。私も嫁ぐ前は無知でしたから笑わずまじめにお答えしています。まだまだ知られざる酪農ですね。

ホルスタインのオスが産まれた場合は１週間ほどミルクをやりメスと同じように愛情をかけて育て市場へ。肥育農家で肉牛になります。和牛に比べて肥育期間が短く大きく育つので、お手ごろ価格の牛肉に。スーパーでは国産牛と表記されています。また初任牛には分娩を軽くするためにホルスタインより小柄な和牛の種を人工授精することがあります。体格が良いうえ和牛に近い肉質、交雑牛と表記されます。そして、搾乳牛としての役割を終えた牛も市場へ。こちらも表記は国産牛。一般的に脂肪が少ない安価な肉ですが、最近は熟成肉として付加価値をつけて販売される場合もあるようです。昔はホルスタイン独特の香りがしましたが、餌や肥育方法が向上してそれもなくなりました。ホルスタインの個性を生かした美味しいお肉、皆さんも知らず知らずに召し上がっているかもしれません。

さて、乳牛の話をしましょう。乳を出してもらうには、分娩をしないといけません。
子牛は分娩できるようになるまで２年の育成期間が必要です。２年は無収入の状態で費用をかけて体を大きく、足腰を強く育てます。分娩してからは、朝夕毎日搾乳をします。泌乳にたくさんのエネルギーを使うので、元気そうに見えていても体調の変化に要注意です。
1キロの牛乳を生産するのに500リットルの血液循環が必要で、1日に50キロも乳を出すのだから、フルマラソンをずっと走り続けているようなエネルギー消費状態なんだよ、と獣医師に教わりました。がんばるのは牛、そのがんばりを最大限に引き出せるお世話を、どこまでできるかが酪農家の仕事です。牛は経済動物で、結局は人のため自分のための世話では、と思うこともありますが、一日の単位でみると100％牛のための作業です。今日もみんな元気だった、事故なく無事だった、餌はおいしかったかな、よく寝られたかな。いじめられて心配な牛は夢に出てきますし、張るから早く搾って～とせかされて夢で搾乳もしちゃいます。目覚めて終わってない搾乳にガッカリ。

分娩後、２ヶ月たつと子宮が回復。健康な牛は発情がきて、また人工授精をしていきます。私もびっくりしたのですが、乳牛の空胎期間は最短２ヶ月。以降は妊娠状態で搾乳を8ヶ月間続けたのち、次の分娩に備えて搾乳を休む乾乳期を２ヶ月取り、１年１産のサイクルで働いています。牛にとっては乾乳期の２ヶ月間は夢の休日です。このサイクルを守ることは経営に一番重要で、繁殖担当の私の責任たるや…毎日牛の観察に余念がありません。女性特有の、なんかいつもとちがう、なんか気になるセンサーをピンピンに立てて、牛とも会話しながら発情を発見していきます。もともと人間観察は得意だったのですが、さらに表情がわかりにくい牛で実践していたら、達人の域に入ってきたかもしれません。（夫は嘘はつかない人ですが、言わないでいることがあるのはすぐわかります）

牛は大きい体をしていながら、気が小さい動物です。搾乳しようとすると、ほぼ蹴ります。のんびり搾乳なんてできません。乳頭は４本ありミルカーを吸い付かせるのに４アタック。どこがスイッチになっていて蹴ってくるかはわかりません。牛の個性に応じて、なだめつつ、怒りつつ、私の声に慣れさせて信頼関係を構築しつつで怪我なく搾れます。人間側が怖がったり、動揺したり、上の空だったりするのも、牛はすぐさま察知。体をぴくぴくさせたり、フェイントするかのように足を上げ下げしたり、もっと集中せいっといわんばかりに一撃くらわせたりします。この原稿のネタを考えながら搾っているのも、牛にはバレバレ。油断禁物です。だいじょうぶ、すぐ終わるよ、今日もかわいいね、と話しかけながら搾ると牛も穏やかになっていきます。言葉は通じずとも「気」は伝わっています。リラックスさせて気持ちよく搾ると牛乳の味も格段に美味しくなっているはず。人の思うとおりにはならない生き物商売の難しさをかかえながら、一瞬通じ合った喜びが日々の糧です。

酪農家の生活と牛との関係について、さらっと書きましたが、自由にならない苦しい部分もたくさんあります。
・家族全員で休めない＝旅行には行けない　・病気になっても付き添いはいない
・誰かが仕事が出来なくなると負担が増えてすぐ窮地に追い込まれる＝慢性的な人手不足
・後継者不足　・家族経営にしては大きすぎる投資（借金）
・寒さ、暑さ、ばい菌（感染症）、怪我との戦い　・酪農はひとりではできない（協力必須）
政府がすすめる農業の大型化、効率化、環境問題にどう向き合うか、先の問題も含めれば頭が重くなることも多々あります。が、焦点を「最高に美味しい朝食を食べているのは間違いなく我々」に合わせるとどうでしょう。心地いい暮らし、心地いい気分になってくる。それが現在の私の生き方です。牛に関してもそう。いい牛もいれば悪い牛もいる。でも個々の長所に焦点を合わせたらどうでしょう。その瞬間に、うちにいる牛はみんないい子。特別な愛情がわいてくるのです。

おさまらないコロナ渦、不自由が増えた世の中で同じような考え方で暮らしている人が増えたように思います。苦しいながらも、考え方の工夫、心の持ちようでなんとか皆で乗り切れますよう祈ります。

最後に夫に聞いてみました。生まれた時からこの環境で、不自由だな、つらい、と思ったことはないですか？　生まれた時からの生活だから、物心ついた頃には、あきらめがついていて、同時に腹をくくっていたんだと思う。起きたら目の前にすぐやるべきことがあって、大自然を相手に、土作り、牧草作り、良質な餌作りに奔走し、牛のおなかをいっぱいにしてやりたいと思う日々で、自分のつらさを考える間もなかったそう。先祖が開拓した地で生きていく覚悟を、幼い頃から持っていたんですね。どんな環境にも負けない北の酪農家、ここにあり。夫が勇者に見えました。

筆者
原田　希　ハラダ ノゾミ

1973年　大阪府吹田市生まれ
2006年　酪農家との結婚を機に
　　　　北海道標茶町へ移住
　　　　自身も酪農家に
2017年　北海道農業士に認定

北海道指導農業士の夫とともに
新規就農者の支援や、
女性の農業者向けの勉強会、
道外からのお嫁さんの会の
お世話係を担当